

東京赤坂乃木坂

小田三郎

旅館



二月三日
春

村
大坂東已高
百二十里行
佐野五里

あと帰宅は一歩石上をひき抜く所で、身を引く。
あだせ山に生えりかくす。其の内情がし難い。上手くしむ
老方へ高付、御脇有立ト(ばじゆた)此には黒えり(後者を)
24日向満造金(四十円ナ仁心)を用意し、目的の人跡才明(さう
の)人をもとが御れを人達よりおにぎらひだして口と行う事小ト(まことに)
来る所はた足への組若木を立つ。おおの次の次第にて立仕子。②次
に御承老人が玄子(アキコ)を成中(アキナ)へとおの國保は、室ニテ、玄子(アキコ)
リ助くへは西麻(アシマ)ーく。彼に起オとしてあれが立草(アシタス)は持
有(アヒツ)は(呼吸せよ)テリゲートガ)の林(アシタス)重(アシタス)セヘンナリモ
上(アシタス)方(アシタス)モ(アシタス)ト(アシタス)の(アシタス)御田(アシタス)に(アシタス)成(アシタス)功(アシタス)を(アシタス)
ナム③乃(アシタス)モ(アシタス)大(アシタス)先(アシタス)の(アシタス)事(アシタス)を(アシタス)ナリ大(アシタス)
13行(アシタス)モ(アシタス)勝(アシタス)ト(アシタス)有(アシタス)妙(アシタス)行(アシタス)

いへば上り便しをよにと、ひつ改身をかねてす。おま
 すす大足の少くもせし。おもむく入小がけ用事の一をあ
 そはる。是よりなほりそはれ。其のとれし事の實、不意が倒の御
 しめに、行跡同様の色をさざじてはぬ。林の大之へは孔が名曰
 せとゆ。何事に一もかし高名させ。必焉ハトト。一方は
 其の行のゆゑに、設計極アリト。ライン丈は多方面ともう
 す。けつ中も元へぬやう要。いやう運び申は、出走の日は
 理由の件、景物も有らず。心事有るは、某事即ち御用事
 の如に三十日を越し支那を出航に際して、船主
 計算に立たざる必要有る。本人に内情やねば御用事はあ
 オサシム。松下(大通)、(主大通)、(主大通)、(主大通)
 師封入はる。一覽路アハル之に左右四、三十メートル
 五

十三をかへ更に公事達の醜今を
4月4日正午に至る
 望月(久は軍の節、吉山にて)一、立派の大足から生にあ
くに心えがく・井手がすけは直ぐりて7時終
けつ
せう心が生れ辰じゆの立すに井手に詰けめも細めす柳田園男
子が生ふ一三(ひみ大富竹三、唐馬竹五)子が但景平親御お
在り、對支内役を因めし絶而其間金の支拂小ほ之と無事の
折合に生進す是ふと遂に生ふに中込サヤ由とヰムニシヤム
文を生半通柳田に令又の希望を満たし我党同志が小半
可がふと鳥に油揚をすくは因りて、笠翁節会の傍有りて
上立て仕事似しけれ柄下に置くの上也○尤もセ本さうと
出來ず、ぬづか減ざるもして置けば將因がさむ此處が
追加はセ本の外も知らぬ、勿いみすてくらや○はる

と外せば人十人弱に丸も三更か朝も未去りてる。一四
 トヨタチを召したる醜也も本よりお城より徳宗とヤ本より
 トヨタチの家は秋山、一重には上野加藤家、徳宗も人達
 へは新宿有りて、当甚に銀先車舟まつての劇
 第中之御ゆきしに大矢の怪此かとて本と光
 チル。○又一重にはいとが一弓の取すつ必要は大田馬の言
 く之れ、其子坂口の報告そろひや、内田す。床次は詫
 くとや。今は林が上あら。○床次、小松、岡經豊に詫し
 里くら。大之す。○小松は下り。○治勝勝本の一件と。
 之を詫ひ。○これは別一が失意に歸らるす故に足立士
 正期を出でてはかくか会性を除く。か申う。即ち即ち。○足
 は政に林家す。○而せえうと云ふ宿節からを媒酌に乳

かに算せんを知りしも妻の舊病にて既せん因リス
 少々多く、依へば今は今せつ不^ハ理^ハと大之の夫婦の事
 たり。此^ハ我^ハも^ハおも^ハき^ハし、而^ハは運^ハは運^ハて向^ハく可^ハス。
 嫁^ハは^ハ、更^ニ去^ハよ^ハト者^ハ輕^ハめ一^ハ也^ハ。故^ハ日^ハヤ
 い、^ハの^ハ人^ハ伊^ハと^ハ一^ハ来^ハす^ハと^ハヤ^ハ引^ハ下^ハり^ハ。就^ハは^ハ是^ハ四^ハ其^ハ
 方^ハ解^ハ一^ハう^ハ解^ハり^ハ必^ハ安^ハ有^ハテ^ハ。成^ハて^ハ若^ハく且^ハ能^ハ那^ハ
 は^ハされ^ハ、勝^ハつけ^ハて^ハ一^ハと^ハし^ハ日^ハ久^ハ某^ハ博士^ハを
 ひ^ハれ^ハた^ハ、勝^ハつけ^ハて^ハ一^ハと^ハし^ハ日^ハ久^ハ某^ハ博士^ハを
 ひ^ハれ^ハた^ハ、勝^ハつけ^ハて^ハ一^ハと^ハし^ハ日^ハ久^ハ某^ハ博士^ハを
 ひ^ハれ^ハた^ハ、勝^ハつけ^ハて^ハ一^ハと^ハし^ハ日^ハ久^ハ某^ハ博士^ハを
 ひ^ハれ^ハた^ハ、勝^ハつけ^ハて^ハ一^ハと^ハし^ハ日^ハ久^ハ某^ハ博士^ハを

八田三九之

二月三日

藤太郎

大氣と仰く諸君よりうそんせん
をうながすにあつて大氣の十七二岁
にして此の聲の三口あ生えしむる
一キニ方あゆムハトシテモ其聲を覺ゆ
へりれどもありまぬ

(四)

二月二十六

採訪日記
採訪日ハ微生物の層幹部連大ニ壹ニ申候日下講習會ニ多
く相極メ居候間通好ナル由日ソ既ニ幹事會相開キ而禮事上
テコトニ取極メ申候向左様テ了事被歸復候
本朝ノ新聞紙ノ版一日、衆議院於ケ管内根木屋候
ガ日支回歴ニはキ還ニ復説シ國氏ノサキニ支那、政治家海
ヲ起スノ要ナキッ實質ニ次官ハ其必要ヲ認ムトニヘニ候
審定、貴下ノ申設ノ如ク日支親善ハ刻下ノ多諸レテ官民
共ニ其心ニ及テ接近ノ策シ議論モ其方法ノ如クニテ熟慮ノ副相
共ニ策ニシテ拙ナルトキ一過筋石却ニ有寒大ニト有三申
又同一結果ノ見ルトスルモ其方法ノ如クニテ熟慮ノ副相
主スル、右設以ノ要ナキトニ而至候、赤年以テ勤カシム
リ大石ツ勤スニ大石ヲ其中央ニ抑ヘトキハ自由自在
ニ勤カシ得ムエ其カ石ヲ大石ノ一隅ニ抑ヘトキハ其且の
ニ蓮シ難ク候、同ニキト大石ニ候也其用意ノ如クニテ成
印不成印ノ別ノ生エハ只ニ而至候
從事日本ノ人多ク櫻花ニ學ヒ櫻花ニ對ニ好意ヲ表ス
ル者有數萬人ノ兼フノ事加ニ候モ此ニ日本ハ獨逸ト
號ニ申候、依テ智識啓發兼ニ因ル教養ノ度重々厚
候

心理ニテ更道ヲ踏ミシハ様在キキノト存候
群集心理ヲ微察之指揮スル新朝也如クニ此三候
寔ニ末國ノ政治外交ニ新朝政治外交ニ帝王候戰後、
於テ一物ニ新朝也ノ世道人心ノ左右ニ様ニ大ト被
厚修ニシ世界一般ノ傾向ニ帝座候
支那ヲ垂涎ニ至リ半日支那觀察聲聲ノ事々ニテ
教育事業盛ニヤ否中日獨處教セアリ故伊藤考
被下度候幸在支那直

外務省支那課長

力村健一候

佐原多士代議士

年井嘉幸氏

大谷清伸

吉永一三氏

宮島太八代

ナド居シヘシ故支那ノ人立上那ノ事情市聞中西上
市決行ナリテ之始也元大阪朝日新聞社編輯部長主
筆鳥居鶴仙氏ハ二十数年占内新聞ヲ兩肩ニ擎ヒ使筆
ヲ揮シシ人ニシテ支那ニ開元事務ニ附ハキシテ支那朝
鮮ニ於テ名士ト利害有り居シ候召同氏ニ支那ニ情仰
田代相前武者力能公共子ヤ理筋士八田五郎氏十ド
虎門事件松井義理公事務官也其時日本政府不許
要一日支那報費難望し終日半飯方乞ソ極ニス計策第六
ハ歲ニ大石ノ下ニ血腰ニカ石ソ投ニト同一級ニシ博愛ニ
シテ公事務官也其時日本政府不許此事件
清文之公事務官也其時日本政府不許此事件
虎門事件松井義理公事務官也其時日本政府不許